

チュツチェフと東方問題

大 矢 温

はじめに

日本でも抒情詩人としてよく知られているフョードル・イヴァーノヴィッチ・チュツチェフは、同時に有能な外務官僚でもあった⁽¹⁾。彼は、大改革期のロシアにあって、たぐいまれなヨーロッパ通として重用され、大きな転換を控えたロシアの政策過程に関与し、特に思想統制の面で活躍した⁽²⁾。彼は1821年にモスクワ大学を卒業すると翌22年から外務院（後に外務省）に就職し、以来20余年をヨーロッパで生活した⁽³⁾。また、ヨーロッパの革命運動によって神聖同盟を柱としたヨーロッパの地域秩序が崩壊する様子を目の当たりにすると、チュツチェフは『ロシアとドイツ』⁽⁴⁾、『ロシアと革命』⁽⁵⁾、『教皇およびローマ問題』⁽⁶⁾、『ロシアにおける検閲』⁽⁷⁾といった一連の政治論文を著した。他方、クリミア戦争敗北の責任をとらされる形でネッセルローデが外務大臣を辞任すると、1858年には新たに外務大臣に就任したゴルチャコフに才能を買われ、ペテルブルク外国検閲委員会議長に抜擢されている。彼はそこで検閲規則の緩和と検閲行政の効率化に力を注ぎ、それ以来終生外国から輸入される書物の検閲に従事したのだった⁽⁸⁾。

他方、チュツチェフがヨーロッパで勤務していた19世紀中葉は、神聖同盟という表面的な秩序の下でヨーロッパの列強諸国が、国内的には革命運動によって動揺し、対外的には非ヨーロッパ地域への進出を巡ってしのぎを削った時代でもあった。つまりヨーロッパの旧来の秩序が内的にも外的にも大きく組み替えられようとした時代だったのだ。中・近東アジア地域に関しては、18

世紀以降顕著になったオスマン・トルコ帝国の弱体化に対応して、西欧列強はその支配地域への進出の機会をうかがっていた。中でもロシアは黒海を經由して地中海に出る海峡の確保に重大な関心を寄せていた。たとえばロシアはすでにピョートル I 世によるアゾフ遠征以来、折りあるごとにトルコとの戦争を繰り返してきたが、これは黒海の内海化とボスポラス海峡の確保をロシア南進政策の柱とみなしたからである。1828 年から翌 29 年に戦われた第 4 次露土戦争では、ロシアはオスマン・トルコの支配下にあるスラヴ系諸民族を解放することを口実として開戦し、トルコに勝利すると、アドリアノーブル条約において、ダーダネルス、ボスポラス両海峡の自由通行権、黒海における通商権を獲得した上、ギリシア、モルダヴィア、ワロキア、セルビアなどに関して介入する足がかりを作った。しかしながら、オスマン・トルコ支配地域におけるロシアの突出した進出は、他のヨーロッパ列強の反発を招く結果となり、オスマン・トルコ支配地域のヘゲモニーを巡る争奪戦は、「東方問題」と呼ばれる近代欧州外交史上の争点へと発展したのであった⁽⁹⁾。

本論では、チュッチェフが著した詩を素材にして、東方問題に関する彼の政治思想を分析してみたい。

第 1 章：クリミア戦争まで——素朴な拡張主義

チュッチェフが若い外交官としてヨーロッパ各地で生活した 19 世紀中葉は、ヨーロッパ全土が革命的動乱の渦中にあった時期でもあった。1830 年にフランスで起きた 7 月革命は彼にとって「革命の時代の到来」を告げる事件のように思われた⁽¹⁰⁾。彼の目にはウィーン体制、神聖同盟によって担われたヨーロッパの地域秩序が崩壊しつつあったのだ。さらにロシア帰国後の 48 年にヨーロッパの諸革命を機に著した論文『ロシアと革命』でチュッチェフは、革命的動乱の渦中で動揺するヨーロッパ情勢を分析している。そこで彼は、「革命」が反キリスト教精神の具現であり、正教精神に満たされた「ロシア」のみがこれに対抗できると主張している⁽¹¹⁾。さらに彼はこの論文の中で、西洋の

破滅を予言し、「この巨大な破滅の上に、聖なる箱船によって浮上する、よりいっそう巨大なこの帝国」としてロシアを描いている⁽¹²⁾。『ロシアと革命』とほぼ同じ時期に書かれた詩『海と岸壁』でも、動揺する西欧と不動のロシアが対比されていると解釈することができる⁽¹³⁾。この詩の中では、西欧の革命的動乱をシンボル化した海は、「すさまじい大波の寄せ波となって」「絶え間なく」「怒号とともに」「うなり声とともに」、専制ロシアをシンボル化している「泰然自若たる」「岸の岸壁を打つ」のだが、やがて「無力化され」「鎮静化される」のだ。

続いて書かれた『ロシアの地理』では、正教帝国の構想がより一層鮮明に描かれている⁽¹⁴⁾。

РУССКАЯ ГЕОГРАФИЯ

Москва и град Петров, и Константинов град—
Вот царства русского заветные столицы...
Но где предел ему? и где его границы—
На север, на восток, на юг и на закат?
Грядущим временам судьбы их обличат...

Семь внутренних морей и семь великих рек...
От Нила до Невы, от Эльбы до Китая,
От Волги по Евфрат, от Ганга до Дуная...
Вот царство русское... и не прейдет вовек,
Как то провидел Дух и Даниил предрек.

この詩では、モスクワ、ローマ、そしてコンスタンチノーポリがロシアの「遺贈の都」とされている。具体的な国境は、「ナイルからネヴァまで、エルベから中国まで」、「ヴォルガからユーフラテスに至り、ガンジスからドナウまで

……」とあまりにも大ざっぱで明らかでないが、少なくとも上記の3つのキリスト教聖地を含む広大な地域がチュツチェフの構想する「ロシア」の版図に含まれることになる。また、この詩では「聖霊が予見しダニイルが予言したごとく」と、旧約聖書の『ダニイル書』にも言及しているが⁽¹⁵⁾、これは16世紀のプスコフの修道院長フィロフェイがとなえた「モスクワ第3のローマ論」の焼き直しである。フィロフェイはアポリナリオス派の異端信仰によって滅亡した古代ローマ教会、およびサラセン人によって滅ぼされたコンスタンチノーポリの伝統を受け継ぐ第3の教会としてモスクワを挙げ、このモスクワこそが永遠不滅の第3のローマであるととなえた。他方、チュツチェフもまた、西欧地域秩序の崩壊という現実を前にして、フィロフェイの「モスクワ第3のローマ論」を換骨奪胎して自分流の「モスクワ第3のローマ論」をここで展開しようとしている。つまり、ヴィザンチン帝国はフェララおよびフィレンツェの公会議でローマ教皇に妥協したが故に15世紀に滅び、そして今、そのローマ教皇を頂点とする西欧も「革命」と妥協したが故に滅亡しようとしている。モスクワこそがキリスト教帝国の首都たる第3のローマであり、旧約聖書でダニイルが予言したごとく、この都は永遠不滅である。と、このようにチュツチェフは唱えようとしているのだ。

ところで、第3のローマたる首都のモスクワ、およびローマ、コンスタンチノーポリの3都をその版図に含む永遠不滅のキリスト教帝国、という構想は、その論理的帰結として異教徒からの聖地奪回と東西両教会の統一とを前提とする。はたしてこの時期に書かれた詩『夜明け』⁽¹⁶⁾、『予言』⁽¹⁷⁾、の中でチュツチェフはロシア人とロシア皇帝に対して、繰り返しコンスタンチノーポリの奪回を訴えている。

РАССВЕТ

Не в первый раз кричит петух;
Кричит он живо, бодро, смело;

Уж месяц на небе потух,
Струя в Босфоре заалела.

Еще молчат колокола,
А уж восток заря румянит;
Ночь бесконечная прошла,
И скоро светлый день настанет.

Вставай же, Русь! Уж близок час!
Вставай Христовой службы ради!
Уж не пора ль, перекрестясь,
Ударить в колокол в Царьграде?

Раздайся благовестный звон,
И весь Восток им огласися!
Тебя зовет и будит он,—
Вставай, мужайся, ополчися!

В доспехи веры грудь одень,
И с богом, исполин державный!..
О Русь, велик грядущий день,
Вселенский день и православный!

この詩ではトルコの国旗に星と月が使われていることから、夜はオスマン・トルコのシンボルであることが想像できる。1連2連では夜明けが近く、ボスボラス海峡を巡って動きが出てきたことを暗示している。さらに、続く3、4、5連ではさらに端的に「立てロシア人よ！いまぞ時は近い！」「キリスト教徒の務めのために！」「立て、元気を出せ、武器を取れ！」「信仰の鎧をまと

え」とコンスタンチノーポリの武力奪回を扇動している。ここでチュツチェフは、異教徒から奪回されたコンスタンチノーポリにおいて、正教の祈禱の始まりを告げる鐘が鳴らされ、その音があまねく東方世界を満たすことを夢想するのだ。さらに翌年に著した『予言』でチュツチェフは、単にコンスタンチノーポリのソフィア寺院の奪回を訴えるのみならず、ロシア皇帝に対して、そこで「全スラヴの皇帝」としての即位を訴えている。

ПРОРОЧЕСТВО

Не гул молвы прошел в народе,
 Весть родилась не в нашем роде—
 То древний глас, то свыше глас:
 «Четвертый век уж на исходе,—
 Свершится он — и грянет час!

И своды древние Софии,
 В возобновленной Византии,
 Вновь осенят Христов алтарь».
 Пади пред ним, о царь России,—
 И встань как всеславянский царь!

このようにオスマン・トルコに対する好戦的な気分を満たされた当時のチュツチェフの目には、外務大臣ネッセルローデの採る親オーストリア外交はヨーロッパ列強諸国に対する弱腰外交と写った。上記の『予言』とほぼ時を同じくして著した無題の詩において、当時、外務省上級検閲官であったチュツチェフは、外務大臣ネッセルローデを自らの上司であることも省みず「私の一寸法師よ！前代未聞の腰抜けよ……！」と罵倒している⁽¹⁸⁾。チュツチェフにとって、ネッセルローデは「その信仰心薄き心」と臆病さ、そしてその怠け心

の故にルーシをして自らの本来的な使命から背かせたのだった。

Нет, карлик мой! трус беспримерный!
Ты, как ни жмися, как ни трусь,
Своей душою маловерной
Не соблазнишь Святую Русь....

Иль, все святые упованья,
Все убежденья потребя,
Она от своего призванья
Вдруг отречется для тебя?..

Иль так ты дорог провиденью,
Так дружен с ним, так заодно,
Что, дорожа твоею ленью,
Вдруг остановится оно?..

Не верь в Святую Русь кто хочет,
Лишь верь она себе самой,—
И бог победы не отсрочит
В угоду трусости людской.

То, что обещано судьбами
Уж в колыбели было ей,
Что ей завещано веками
И верой всех ее царей,—

То, что Олеговы дружины

Ходили добывать мечом,
То, что орел Екатерины
Уж прикрывал своим крылом,—

Венца и скиптра Византии
Вам не удастся нас лишить!
Всемирную судьбу России—
Нет, вам ее не запрудить!..

いよいよ聖地エルサレムの管理権問題に端を発してトルコとの戦争（第5次露土戦争）が1853年に開始されると、緒戦における有利な戦局展開も手伝ってか、チュツチェフのこの好戦的気分は最高潮に達する。1853年秋から1854年春に書かれた詩『聖霊の予言』においてチュツチェフは「ロシアを遺贈の国境へと到せさしむ」「合戦の、そして勝利の日は来たり」と開戦を歓迎し、「そして古きモスクワは」「その3都の最新の都とならん」と再びローマ、コンスタンチノーポリ、モスクワを包括する大キリスト教帝国の構想を繰り返すのだ¹⁹。

СПИРИТИСТИЧЕСКОЕ ПРЕДСКАЗАНИЕ

Дни настанут борьбы и торжества,
Достигнет Русь завещанных границ,
И будет старая Москва
Новейшею из трех ее столиц.

ところが53年11月にナヒモフ提督に率いられたロシアの黒海艦隊がシノペの海戦でトルコ艦隊に壊滅的な打撃を与えると、イギリス、フランス、オーストリア、プロイセンらはトルコを支援してロシアに宣戦を布告し、第5次露土

戦争はクリミア戦争へと発展した。イスラム教国のオスマン・トルコをヨーロッパ列強が支援したこの戦争は、キリスト教に基づくヨーロッパ諸国の協調という神聖同盟の美辞麗句が過去のものとなったことを示すと同時に、英仏間の対立を見抜けないまま開戦したロシア外交の失敗としても銘記された。英仏らの参戦で戦況は一変し、ロシア軍は各地で苦戦を強いられた。ロシアの敗戦を決定づけたセバストーポリ要塞陥落に際して、チュツチェフはその総責任者としてツァーリ、ニコライ一世を厳しく批判している。彼は妻に宛てた手紙の中で「この手の付けられない敗北」の原因をニコライの「驚くべき愚かさ」に帰し⁽²⁰⁾、また、ほぼ時を同じくして書き上げた詩『ニコライ・パーヴロヴィッチに』においては、ニコライの無能ぶりをなじり、「汝はツァーリにあらず、偽善者だった」とこき下ろしている⁽²¹⁾。

Н <ИКОЛАЮ> П <АВЛОВИЧУ>

Не богу ты служил и не России,
Служил лишь суете своей,
И все дела твои, и добрые и злые,—
Все было ложь в тебе, все призраки пустые:
Ты был не царь, а лицедей.

さて、軍事的に敗北したロシアは、1856年のパリ講和条約において黒海の中立化、およびトルコ内政への干渉禁止などの条件をのまざるを得なかった。特に黒海中立化条項は、黒海沿岸の長大な国境線が無防備で開放することを意味した。特に大改革以後にロシア南部の産業化が進むと、軍事的観点に加えて経済的見地からしても、黒海、およびボスポラス海峡の航行の安全確保は重大な問題と見なされるようになる⁽²²⁾。チュツチェフの大キリスト教帝国の構想も、パリ条約の撤廃という当面の課題の前にその実現が遠のいてしまったのであった。

第2章：クリミア戦争後——国策としての地中海奪還

すでに述べたように、クリミア戦争に敗北したロシアは、1856年のパリ講和会議において黒海の中立化、およびトルコ内政への干渉禁止などの条件を盛り込んだパリ条約を受諾させられた。わけても黒海における艦隊及び要塞保有の禁止を骨子とするパリ条約の黒海中立化条項は、ロシアにとって軍事的にも経済的にも多大な損失をもたらした。したがって、クリミア戦争敗北の責任をとる形で辞任したネッセルローデに代わって新たに新帝アレクサンドル二世のもとで1856年に外務大臣に就任したゴルチャコフに課せられた外交課題は、まず、この国会中立化条項を無効化することにあった⁽²³⁾。クリミア戦争後のロシアは、内政面では新帝アレクサンドル二世のもとで農奴制廃止を含む一連の改革が準備される一方で、外交政策の面でもゴルチャコフ外相の元で転換が図られていた。ネッセルローデ外相時代の神聖同盟にみられた、ときとすればイデオロギーに固執した外交路線は、そこからの脱却がはかられ、また行政の効率化も審議された。外国図書の見閲制度の改革に関してチュッチェフがペテルブルク外国見閲委員会議長に抜擢されたのもこの一連の流れの中でのことだった。

当初ゴルチャコフは、フランスに接近することによってパリ条約を撤廃しようとして画策した。しかしながら、1863年にポーランドで独立を求める住民蜂起がおこると、ロシア軍によるその鎮圧に対して、フランスがイギリス、オーストリアとともにロシアを非難し、ポーランド問題に関する国際会議の開催を提案した⁽²⁴⁾。ところがゴルチャコフはこれを拒否し、以後、フランスとの関係は冷却化した。フランスに代わって、以後、ゴルチャコフは鎮圧を支持したプロシアに接近する道を選ぶ。実際ゴルチャコフは、プロシアがデンマーク（64年）、オーストリア（66年）、フランス（70年）と相次いで戦端を開いた際には、好意的な中立を守った。

さらに71年にプロシアがフランスを破ると、ゴルチャコフは黒海における

艦隊と要塞の保持を禁じたパリ条約の条項を破棄することを宣言し、ビスマルクが召集したロンドン国際会議（海峡に関するロンドン会議）においてロシアの黒海における主権復活を認める条約の署名にこぎつける。その後、ゴルチャコフはロシア外交をプロシア、およびオーストリア・ハンガリーに接近させる路線を維持し、1873年にはこれら両国との間で「三帝同盟」を締結した。

ゴルチャコフにとって親フランス路線から親プロシア路線への外交路線の変更は、ヨーロッパのパワーポリティックスの中でロシアの国益を追求するための、いわば方便として採られたものだった。他方、チュツチェフにとってロシアとフランスは、原則的に和解不能の2つの原理を体現した不倶戴天の敵同士であった。事実チュツチェフは、論文『ロシアと革命』において、正教精神を体現する専制帝国ロシアと反キリスト教精神を体現する革命フランスを対置し、両者間の宿命的な対決を予言している⁽²⁵⁾。また彼は、論文『ロシアとドイツ』において、フランスに対抗するために親プロシア路線をとるよう提言している⁽²⁶⁾。

このようにゴルチャコフとチュツチェフは完全に見解が一致していたわけではなかった。それにも関わらず、ロシアの外交が親フランス路線から親プロシア路線に変更されたことは、チュツチェフにとってみれば、自らの長年の主張がいれられたように思われたに違いない。また、ポーランド鎮圧、およびそれに対して列強が干渉しようとしたときに、ゴルチャコフがこれに厳しい姿勢で望んだことは、チュツチェフの目に頼もしく映ったに違いない。

このようなゴルチャコフに対するチュツチェフの期待と信頼は、1864年にゴルチャコフに捧げて書かれた詩『ゴルチャコフ公爵に』からも読みとることができる⁽²⁷⁾。

КНЯЗЮ ГОРЧАКОВУ

Вам выпало призванье роковое,
Но тот, кто призвал вас, и соблюдет.

Все лучшее в России, все живое
Глядит на вас, и верит вам, и ждет.

Обманутой, обиженной России
Вы честь спасли,—и выше нет заслуг;
Днесь подвиги вам предстоят иные:
Отстойте мысль ее, спасите дух...

この詩においてチュツチェフは、ゴルチャコフが外相に就任したことを神によって与えられた使命だとし、使命である以上、神の加護があるはずだとし、また、ロシア国内でも「ロシアにおけるすべてよきもの、すべて生きとし生けるもの」が彼に期待しているとゴルチャコフを勇気づけている。さらにチュツチェフは、ポーランド鎮圧の際に列強に厳格な態度で対処したことをとらえて、ゴルチャコフが「だまされ、侮辱されたロシアの」「名誉を救った」とし、「これ以上の功績はない」と彼の功績を高く評価している。最後にチュツチェフはゴルチャコフに対してロシアの「思想を守り抜きたまえ、魂を救いたまえ……」と注文しているが、これは正教信仰を核とした正教帝国を夢見るチュツチェフがその企図を遠回しにほのめかしたものかもしれない。

チュツチェフが夢想した正教帝国について言及するなら、正教信仰によって結ばれたスラヴ系諸民族を糾合した正教帝国の企画は、すでに述べたように、チュツチェフの思想の中でさえクリミア戦争の敗戦直後は一時的にせよ後景に退いていた。しかし、ポーランド蜂起を機にしたロシア国内世論におけるナショナリズムの高まりと、汎スラヴ主義の勃興によって、彼のこの企図はロシアの国内世論の中に支持を見いだすようになった⁽²⁸⁾。このような国内の思潮の変化とともに、彼自身ふたたび、異民族の支配下にある正教徒の解放、および正教スラヴ諸民族の糾合を主張するようになる。

たとえば「東方は疑い深く押し黙る」で始まる1865年7月に書かれた無題の詩において、チュツチェフは昇る朝日によって東方の覚醒を暗示し、東方ス

ラヴ諸民族の政治的民族的復興を期待している^{<29>}。

さらに1866年に当時トルコの支配下にあったクレタ島において、キリスト教系住民が異民族の支配に対して蜂起すると、チュツチェフは「汝は霧の彼方にながく」「隠れしか、ロシアの星よ」で始まる無題の詩を書いた^{<30>}。この詩でチュツチェフは、ロシアがクレタ島のキリスト教系住民の「食い入るような眼差しに」応えて、彼らを支援するべきだと主張し、「めざめよ、今か、しかしらば永久にないのか……」とロシア政府の介入を強く訴えている。しかしながら、ロシア政府はイスラム世界におけるキリスト教徒の保護する旨のアピールを発したものの、この問題に関しては消極的な態度に終始した^{<31>}。せいぜいキリスト教徒のための慈善舞踏会が開かれたただけであったが、チュツチェフにとってこれは小手先の「余興」にすぎなかった^{<32>}。

さて、1867年3月にモスクワで民族学博覧会が開催されると、その機会にスラヴ民族の代表を招待したスラヴ会議が開かれた。このとき、会議の参加者を歓迎するために宴会で朗読する詩をチュツチェフは書いている。これは『スラヴ人へ』と題された9連からなる長大な詩で、3月14日の「モスクワ報知」紙にも掲載された^{<33>}。この詩は、スラヴ諸民族の「家族宴会」としてのスラヴ会議への「身内」の参加者を歓迎し、スラヴ諸民族の兄弟関係を歌い上げると同時に、スラヴの「家族」の「小さからぬ恥」、「われわれのユダ」たるポーランド人に対する反感をあおり立ててもいる。これはポーランドがカトリックを信仰しているために、スラヴ諸民族を包括する正教帝国というチュツチェフの構想にとって不都合なだけでなく、ポーランド蜂起を機にロシア世論がポーランドに対して非好意的になっていたこととも関係するかもしれない。実際、この会議にはポーランドの代表は招待されていなかったし、また、会議の開催日にあわせて各種の反ポーランド集会在組織されたという^{<34>}。

このような催し物が行われた原因は、スラヴ民族同士の近親感という自然な感情もあるだろうが、なによりも民族的一体感を醸成してロシアに有利な形で東方問題の処理を進めようとする政府の意図もあったはずだ。1867年3月の詩『徒労』が書かれたのは、政府や社会の上層部における民族問題の重要性に

対する無理解にチュッチェフが立腹した結果だったと言われる³⁵⁾。他方、政府上層部、なかんずく外務省において民族問題の重要性を的確に理解していたのはゴルチャコフ外相だった。彼はバルカン半島諸国を統合し、ヨーロッパ列強に先駆けてロシアがこの地域の覇権を確立するための要因として、スラヴ系という共通の民族性を利用しようとした。彼はクリミア戦争の敗北以来、東方問題におけるロシアの発言力強化に腐心したのだった。そんなゴルチャコフが1867年に外務省永続勤務50周年を迎えた。これを機に彼は宰相に就任し、文官の最高の地位についた。これを祝賀して出版された文集にチュッチェフは彼をたたえる詩を発表している³⁶⁾。

НА ЮБИЛЕЙ КНЯЗЯ А. М. ГОРЧАКОВА

В те дни кроваво-роковые,
 Когда, прервав борьбу свою,
 В ножны вложила меч Россия—
 Свой меч, иззубренный в бою,—
 Он волей призван был державной
 Стоять на страже,— и он стал,
 И бой отважный, бой неравный
 Один с Европой продолжал.

И вот двенадцать лет уж длится
 Упорный поединок тот;
 Иноплеменный мир дивится,
 Одна лишь Русь его поймет.
 Он первый угадал, в чем дело.
 И им впервые русский дух
Союзной силой признан смело,—

И вот венец его заслуг.

ゴルチャコフ宰相兼外相に捧げられたこの詩は、クリミア戦争を屈辱的な条件で終結して以来、ヨーロッパの列強を相手に「多勢に無勢の戦いを」12年間にわたって不屈に続けたゴルチャコフをたたえるとともに、彼が民族問題に問題の核心を見据えたことを「彼の功績の冠」として高く評価したものだ。さらにこの年の暮れ、フランスがプロシアとの戦いに敗れると、ゴルチャコフはトルコの一体性を以後保証しないとする外交文書を公表する³⁷⁾。この外交文書は東方問題に触手を伸ばすヨーロッパ列強の反発を買ったが、プロシアに破れたフランスはもちろん、プロシアもこの文書公表時には講和条約を締結していなかったため、ロシアの中立と引き替えに矛を取めた。一人イギリスが反露同盟を画策したがフランス、プロシアを欠いたこの企図は挫折した。まさにゴルチャコフ外交の勝利だった。チュツチェフはトルコに対するロシアの強硬姿勢を歓迎し、トルコの支配下にあるスラヴ系住民の蜂起を予想して『皇帝官房の至急便を読んで』を翌1868年元旦付けの新聞「ロシア人」に発表している³⁸⁾。

ПО ПРОЧТЕНИИ ДЕПЕШ
ИМПЕРАТОРСКОГО КАБИНЕТА,
НАПЕЧАТАННЫХ
В «JOURNAL DE ST.-PÉTERSBOURG»

Когда свершится искупленье
И озарится вновь Восток,—
О, как поймут тогда значенье
Великолепных этих строк!

Как первый яркий луч денницы,

Коснувшись, их воспламенит

И эти вещие страницы

Озолотит и освятит!

И в излиянье чувств народных,

Как божья чистая роса,

Племен признательно-свободных

На них затеплится слеза!

На них записана вся повесть

О том, что было и что есть;

Изобличив Европы совесть,

Они спасли России честь!

チュッチェフによれば、このようなロシア政府の断固とした姿勢の表明は、異民族の圧制のもとで呻吟するスラヴ諸民族を「明星の最初の明るい光線のよように」照らし、民族感情をかきたて、彼らを反トルコ蜂起へと駆り立てるはずだった。ただし、実際にはこの外交文書が原因となった蜂起は起きず、フランスの敗戦を一気に東方問題の打開へ結びつけようとするチュッチェフの待望は実を結ばなかった。

しかしながら、プロシアとの1870年からの戦いにふたたびフランスが敗れると、ロシアの外交はパリ条約無効化にむけて大きく前進する。1870年10月19日付けのゴルチャコフ宣言が公表されたのだ³⁹。この宣言は、1856年のパリ講和会議で定められた、黒海におけるロシアの権利制限条項を破棄することを宣言したものだ。ただちにプロシアのビスマルク宰相の呼びかけで1871年に「海峡に関するロンドン会議」が招集され、その席でロシアの黒海における主権復活を認める条約が調印された。ここにクリミア戦争以来のロシアの宿願が成就したのだ。プロシアに接近することによって、フランスの敗戦

に乗じて、国際的に孤立したイギリスを押し切ったのロシア外交、なかんずくゴルチャコフの外交手腕の勝利だった。

さっそくゴルチャコフの功績をたたえて『1870年10月19日回状に関してゴルチャコフ公爵を祝う』と題する文集が出版された。そこにチュツチェフは「そう、あなたは約束を守った」で始まる無題の詩を発表している⁴⁰。

Да, вы сдержали ваше слово:
Не двинув пушки, ни рубля,
В свои права вступает снова
Родная русская земля.

И нам завещанное море
Опять свободно волной,
О кратком позабыв позоре,
Лобзает берег свой родной.

Счастлив в наш век, кому победа
Далась не кровью, а умом,
Счастлив, кто точку Архимеда
Умел сыскать в себе самом,—

Кто, полный бодрого терпенья,
Расчет с отвагой совмещал—
То сдерживал свои стремленья,
То своевременно дерзал.

Но кончено ль противоборство?
И как могучий ваш рычаг

Осилит в умниках упорство
И бессознательность в глупцах?

この詩でチュッチェフは、「大砲も1ルーブルも動かさず」にロシアが権利を回復することを慶賀し、「血ではなく、智によって」勝利を得た「計算と勇気を両立させた人」ゴルチャコフを祝福している。それと同時に、まだロンドン会議での調印が終わっていなかったためであろうか、ロシア政府部内でのゴルチャコフに反対する勢力を危惧する。彼はゴルチャコフの行く手を阻む政府部内の「小理屈屋の頑固さ」、「愚か者の無分別」の存在を指摘し、これらを牽制している。とはいえ、チュッチェフの危惧とは裏腹に、ロンドン会議においては黒海に関するロシアの権利回復を定める条約が無事に調印された。黒海の奪還である。チュッチェフは早速この喜びを『黒海』という詩にして著わしている。この詩においてチュッチェフは、「偉大なセバストーポリ」と「不滅の黒海艦隊」を回復した喜びを、途中プーシキンの自由詩を引用しながら歌い上げている。

かくしてクリミア戦争の敗北以来、チュッチェフの正教帝国の夢の実現を阻んできたパリ条約は破棄された。そして、パリ条約の束縛からロシアが解放された後、すでに晩年を迎えたチュッチェフの詩に、ふたたび正教信仰を軸とした楽天的な拡張主義が復活しているのを見ることができよう⁽⁴¹⁾。

День православного Востока,
Святись, святись, великий день,
Разлей свой благовест широко
И всю Россию им одень!

Но и святой Руси пределом
Его призыва не стесняй:
Пусть слышен будет в мире целом,

Пускай он льется через край,

Своею дальнею волною

И ту долину захватя,

Где бьется с немощию злою

Мое родимое дитя,—

Тот светлый край, куда в изгнанье

Она судьбой увлечена,

Где неба южного дыханье

Как врачество лишь пьет она...

О, дай болящей исцеленье,

Отрадой в душу ей повеи,

Чтобы в Христово воскресенье

Всецело жизнь воскресла в ней...

むすび

神聖同盟崩壊後のヨーロッパにおいて、理念ではなく大国間の国家エゴイズムの均衡の上にロシアの国益を追求しようとしていたゴルチャコフにとって、ヨーロッパの事情に通じたチュツチェフは貴重な人材だった。輸入図書に対する検閲政策を諮問してチュツチェフの意見を尊重し、彼をペテルブルク外国検閲委員会議長に抜擢したのも、ゴルチャコフがチュツチェフの才能を高く評価していたからにはほかならない。だが、だからといってチュツチェフとゴルチャコフとが外国政策に関して一致した意見を持ち合わせていたということにはならない。すでに述べたように、ゴルチャコフが大国間の国家エゴイズムの均等

の上にロシアの国益を追求しようとしたのに対して、チュツチェフは正教理念による帝國的秩序の中にロシアの未来を見ていた。また、ふたりのフランス観について見ても、ゴルチャコフにとってフランスはヨーロッパにおけるパワー・ゲームの1プレイヤーにすぎなかったが、チュツチェフからすればフランスはロシアにとって不倶戴天の敵、「革命」精神の具現であった。この点からもチュツチェフの思想が彼独自のものであり、政府の外交政策に従属したものでないことが理解できる。ただし、パリ条約の無効化、および民族的特質を利用した東方問題の解決というゴルチャコフの外交課題は、多くの点でチュツチェフの正教帝国の構想に合致していた。チュツチェフがゴルチャコフを高く評価し、強い期待を持って彼を見ていたのはこのためだった。チュツチェフはしばしばファナティックなナショナリスト詩人として見られることが多いが、ファナティックなナショナリズムと見える彼の拡張主義を支える国際政治に対する醒めた目や、叙情的な詩に託された独自の政治思想を看過して彼の思想を語ってはならないのだ。

なお、本論の対象外ではあるために触れることができなかったことではあるが、ゴルチャコフの外交政策を、ロシア国内の一連の改革と結びつけ、大改革の一環として位置づける作業が必要ではなかろうか。今後の課題としたい。

注

1. チュツチェフの思想を外務官僚としての側面から分析したものとしては、拙稿「Ф.И. チュツチェフとヨーロッパ諸革命」、中央大学社会科学研究所編、『革命思想の系譜学』、1996年を参照。
2. チュツチェフの思想を検閲官としての側面から分析したものとしては、拙稿「Ф.И. チュツチェフと検閲改革——専制の擁護と言論の自由の問題によせて——」、北海道大学スラブ研究センター、『スラブ研究』41号、1994年を参照。
3. チュツチェフの伝記については、上記拙稿「諸革命」および「検閲改革」

の注を参照。

4. Ф.И. Тютчев, “Россия и Германия” в кн.: Политические статьи, Paris, YMCA Press, 1976.
5. Ф.И. Тютчев, “Россия и революция” в кн.: Политические статьи, Paris, YMCA Press, 1976.
6. Ф.И. Тютчев, “Папство и римский вопрос” в кн.: Политические статьи, Paris, YMCA Press, 1976.
7. Ф.И. Тютчев, “О цензуре в России” в кн.: Политические статьи, Paris, YMCA Press, 1976.
8. См. Отчет о действиях Иностранной цензуры за 1859 года, цит. по статье М. Бпискмана, “Ф. Тютчев в комитете цензуры иностранной”, Литературное наследство т. 19-20.
9. 「東方問題」に関しては、エドガー・ヘッシュ著、佐久間 穆訳、『バルカン半島』、みすず書房、1995年、およびD. ジョルジェヴィチ、S. フィシャー・ガラティ共著、佐原徹哉訳、『バルカン近代史』、刀水書房、1994年を参照。
10. И.С. Аксаков, “Биография Федра Ивановича Тютчева”, М., 1866, с.65.
11. Тютчев, “Россия и революция”, с. 32.
12. Там же, с. 50.
13. “Море и утес”, Ф.И. Тютчев сочинения в двух томах, М., 1980, т. 1, с. 102.
14. “Русская география”, Тютчев, там же, с. 104.
15. 旧約聖書、「ダニイル書」、第2章44節。
16. “Рассвет”, Тютчев, указ. соч. с. 109.
17. “Пророчество”, там же, с. 115.
18. “Нет, карлик мой! трус беспримерный!..”, там же, с. 116.
19. “Спиритистическое предсказание”, там же, с. 137.
20. См. письмо к жене от 17 сентября 1855г., Тютчев там же, т. 2, с. 174-177.

21. “Н П”, Тютчев, там же, т. 1, с. 144.
22. См. Н.И. Хитрова, “А.М. Горчаков и отмена нейтрализации черного моря 1856-1871 годы”, в кн.: Канцелер А.М. Горчаков 200 лет со дня рождения, МИД России, 1998.
23. См. там же.
24. ポーランド蜂起に関しては、山本俊朗・井内敏夫著、『ポーランド民族の歴史』、三省堂選書、1980年参照。
25. См. Тютчев, “Россия и революция”, с. 32.
26. Тютчев, “Россия и Германия”, с. 20-23.
27. “Князю Горчакову”, Тютчев, там же, с. 169.
28. ポーランド蜂起を機にしてロシア国内の世論がナショナリスティックなものになった過程については、拙稿「ゲルツェンの自由印刷所活動と政府の検閲政策」、ロシア史研究会、『ロシア史研究』第56号、1995年を参照。
29. “Молчит сомнительно Восток,..”, Тютчев, указ. соч. с. 175-176.
30. “Ты долго ль будешь за туманом...”, Тютчев, там же, с. 185.
31. Там же, с. 345.
32. Там же.
33. “Славянам”, Тютчев, там же, с. 190.
34. Там же, с. 346.
35. Там же, с. 347.
36. “На юбилей князя А.М. Горчакова”, Тютчев, там же, с. 191-192.
37. Там же, с. 347.
38. “По прочтении депеш...”, Тютчев, там же, с. 193.
39. “Церкуляр А.М. Горчакова дипломатическим представителям России при дворах держав, подписавших Парижский трактат 1856 г.”, в кн.: Канцелер А.М. Горчаков..., с. 335-338.
40. Тютчев, указ. соч. с. 348.
41. “День православного Востока,..”, Тютчев, там же, с. 220.